



日本科学者会議 (JSA) 滋賀支部
NEWS LETTER

2020年9月8日発行 第59号
事務局長 水原 渉
TEL/FAX 0749-47-5169 (共通)
go-ma-me@hi3.enjoy.ne.jp

【報告】滋賀支部 2020年度(第53回)定期大会

事務局長 水原 渉

去る8月9日に2020年度「日本科学者会議滋賀支部」第53回定期大会を、「大学サテライト・プラザ彦根」会議室で開催した。新型コロナ対応と遠隔地居住の便宜を考慮し、従来型の「直接」に加え、「Web」参加も可能とする幹事会決定により、これを可能とする同会場が選ばれた。

事前に支部全会員に議案書を送付し(7月9日Eメール送信、メール被登録会員には同11日)、支部ニュース(同8日発行第57号)で滋賀支部定期大会の開催告示と次期幹事などの立候補を募集した。この段階で議案書への若干の追加要請があった。

参加は14名(直接:7名、Web:7名)で、議案書へは追加要望(滋賀医大への言及)が出され、これも含め承認がされた。論議自体は活発になされたが、特に会計報告に集中し、この採決では「次期幹事会へ修正報告をし、承認されること」の条件の下で報告が採択された(数名は保留)。

Web会議用のアプリZoomの特性も含めた幾つかの要因による会議進行上の混乱もあったが、今後の教訓、改善要件としたい。Zoom準備と関連する機材の用意、会場設営について河幹事をお願いした。起因する混乱可能性は予想され、その回避の工夫にも労を取って頂いた。ここに感謝の意を表したい。

【実践報告】コロナ後の学校像の探求

滋賀県立大学 福井雅英



<コロナ危機から考える授業>

6月後半、私学の高校二年生に、「コロナについて考える」というゲスト授業をする機会があった。「コロナと聞いて思い浮かぶ言葉」を連想ゲーム風に出してもらい、それをつないで考えた。「クラスター、マスク、自粛、パンデミック、伝染病、武漢、志村けん、テレワーク、消毒、密、給料減る、休業補償」と続い

た。出た言葉を板書して、少しやりとりしたのは「武漢」。市場、食生活、開発、ウイルスと、生徒と応答しつつ問題を広げた。教室の雰囲気を一気に変えたのは、「給料減る」という、割と濃い化粧をした女子の一言だった。すかさず、「バイトか?時給いくら?」と問いかけると、「1020円」という答えに、教室が一瞬どよめいた。「高い」「ええやん」と一気に盛り上がって集中した。「何のバイト?」「タコ焼き屋」。隅っここの男子は「俺980円。蕎麦屋」とつぶやいた。「コロナ」から「給料減る」までが繋がった。見えないウイルスの怖さから、外出の自粛が仕方ないものと理解しつつ、保護者や自分の減収など生活に直結する問題に悩んでいる様子が浮かんだ。自分の日々の暮らしと足元の問題が、世界のあり方や地球環境と続いていることを視野の内にとらえた。授業後、以下のような感想があった。

○まず始めにみんなの連想したことを聞き、そこから一番反応のよかったところから次に進むという進め方のおかげでとても楽しく授業を受けられた。このコロナ禍の因果関係を一つずつさかのぼることで、今まで漠然としか知らなかったこともしっかり知れた。最後にも「感想を書く」だけでなく、「自分で深めたいこと」をヒント付きで書くというのも書きやすく、自分の考えをまとめやすくてとてもよかった。

○「クラスター」「パンデミック」とかの言葉も「コロナ」の付属品やと思ってたけど…コロナで話題になった言葉全部が繋がっていることがわかりました。…考えることが多すぎて、頭がこんがらがって何書きたいのかもよくわからなくなってきたけど、今日のお話はとても印象に残ったし、考えることが、学ぶことが多かったです。それをしっかり整理して調べて私なりにコロナがどう繋がっているのか、これから何をしていくべきか、これからどんなことが起こる可能性があるのか考えていこうと思います。

○「(コロナの)前のように戻ってほしい方がいいのか」ということで、私も前の環境よりいい環境に変えない

といけないなと思います。…政治家の方の無力さや経済がどんだけ打撃を受けたか、どれだけ中国に頼っていたかがわかったなと思います。前の環境よりいいようにするには、中国に頼りすぎないのと、もう一度政治について考え直さないといけないんじゃないかと思いました。

○私が授業を聞いてもっと深めたいと思ったことは、「命の普遍性について」である。グローバル化が進む今の世界には互いの存在を認め、互いに手を取り合い、助け合うことが大事だと思うからだ。

○確かに今ではコロナが危ないとしか目を向けてなかったけど、元凶を辿るって大事やなって思った。…これ考えた時ちょっと視野広がったって感じた。

<学校のあり方をとらえ直す>

コロナ危機のなかを生きる高校生たちの生の声を直接聞きながら応答して、彼らが考えたいと思う事柄を深める学びが求められていると切実に思った。グローバル資本の跳梁跋扈を促進した新自由主義の災厄は、いまや生活を通して感じて見える学習対象になっている。生活に根ざす教科横断的な学習の構想など教師の専門性発揮のチャンスになり得る。



【報告】「原水爆禁止 2020 年世界大会・ 科学者集会 in 福井」

滋賀支部代表幹事・実行委員 畑 明郎

コロナ禍のため講演要旨集は発行するが、2020年8月2日13:00~15:30にZoomによるオンライン報告会方式で開催され、68名が参加し、滋賀支部からは畑、井戸会員および野口幹事の3名が参加した。

基調講演は、JSA事務局長・東北大学名誉教授[科学技術史]の井原聰(さとし)氏が、「科学者の社会的責任と軍事研究」と題して講演した。軍事研究と民生用研究の区別をあいまいにした軍事研究推進の動きを批判し、殺りく性を持つ軍事研究と安全・安心性の民生用研究は決定的に違っていると指摘した。

一般講演1は、愛知支部・奈良大学教授[歴史学]の高橋博子氏が、「小型核の歴史的検証」と題して講演した。「使いやすい核兵器」とされる小型核について報告し、被害者にとっては、低核出力でも小型でも使って良い兵器ではない。核兵器を使用させないため

に、こういう表現を許してはいけないとして。

一般講演2は、滋賀支部・弁護士の井戸謙一氏が、「福島事故後に由来するセシウム含有不溶性微粒子のリスクについて」と題して講演した。

セシウム含有不溶性微粒子は、その多くが気管支から肺胞に入り込む大きさであり、β線を発射して内部被ばくのリスクが注目されるが、健康被害調査が全くされていないと警告した。

一般講演3は、京都支部・京都工芸繊維大学名誉教授[生物化学]の宗川吉汪氏が、「被ばく発症を隠蔽する福島県甲状腺検査評価部会」と題して講演した。福島県甲状腺検査評価部会は、避難地域を高線量地域、中通りを中線量地域、浜通りと会津地方を低線量地域として甲状腺検査を実施・解析してきたが、初めに結論ありきで、適当な地域分けをし直すことで県立医大資料の結果を隠ぺいしたと報告した。

一般講演4は、福井支部・工学院大学教授[政治学]の小野一氏が、「ドイツにおける放射性廃棄物最終処分場問題」と題して講演した。2022年を目途に全原発を停止すると決めたドイツは、放射性廃棄物候補地選定法を2013年に制定し、それに基づく最終処分地委員会が設置された。そして、ゴアレーベン紛争や「取り出し可能性」論議などを紹介した。

一般講演5は、福井支部・原発住民運動福井・嶺南センター事務局長の山本雅彦氏が「関西電力の原発マネー不正環流と、関電第三者委員会の調査報告書について」と題して講演した。関電・原発マネーの不正環流は、腐敗構造を推進してきた政府にこそ責任がある。関電・第三者委員会の調査報告書は、原発建設時の暗部が未解明であると具体的に指摘した。

一般講演6は、富山県ジャーナリストの向井嘉之氏が、「イタイタイ病と戦争」と題する講演要旨を提出したが、オンライン会議には参加されなかった。

なお、一般講演者の高橋博子氏、井戸謙一氏および向井嘉之氏は、私が実行委員会で提案して採用された。また、高橋博子氏、井戸謙一氏および山本雅彦氏は、滋賀支部が担当した「原水爆禁止 2012 年世界大会・科学者集会 in 大津」でも報告していただいた。

本集会の成果は、講演要旨集のみならず、『日本の科学者』特集やブックレット発行も予定されている。